平成２２年度　「起業基礎」実践報告

「起業基礎」委員会　今野良祐・吉岡昌悟・岡　聖美
初谷和行・小沢真尚・工藤雄司
吉備　豊・田中友紀子・後藤巻子
日本財団学校プロジェクト　田代純一・芳川龍郎・富永夏子

本校では、起業家精神(アントレプレナーシップ)を育成する授業として、平成15年度より文科省の研究開発指定を受けて２年次学校設定必履修科目「起業基礎」の開発に取り組んできた。１年次の「産業社会と人間」と３年次の「卒業研究」を結ぶ本校キャリア教育の根幹をなす科目である。平成２２年度の実践では、日本財団学校プロジェクトとの連携により、Non Profit やNPOの視点を導入したり、真の社会貢献活動を目指した授業が実施された。本稿では、１年間の授業の取り組みの概要と生徒への３度のアンケートの統計学的分析と今後の展望を総括する。

キーワード：起業家精神（アントレプレナーシップ）　キャリア教育　社会貢献　Non Profit　NPOとの連携授業

１．平成２２年度「起業基礎」実践の概要

（１）起業基礎の目標と目的

「起業基礎」の目標は、「教科『産業』の学習を踏まえた、起業に関する体験的かつ実践的な学習を通して、自らの発想を実態に基づいて具現化すると共に、起業家精神を養い、物事に主体的に取り組む態度を育成する。また、教育、環境、生活、学校、地域、福祉、文化などの社会的な領域において、生徒の身近な視点で問題点を発見し、その解決策を具体的に考え、実践する能力を育成する。」ことである。つまり、社会に貢献すること（社会益）を視野に入れた起業アイデアを具現化することにより、①問題発見力（社会のニーズ、自分の身の回りや社会にある不便や問題に気づく力）、②アイデア力（発見した問題を解決するアイデアを考案する力）、③企画立案力（考案したアイデアを考えるだけでなく実際に実現させる企画を立てる力、アイデアを具体化する力）、④実行力（立案した企画を実際に試してみる行動力、試行錯誤する力）⑤情報力（アイデアを実現するために必要な情報を集める力、立案した企画を世の中に広めていくための情報発信をする力）、⑥チームワーク力（問題解決のために、人の話を聴いてその考えを理解し、協力しあうためのコミュニケーション能力）、⑦プレゼンテーション力（自分の考えや発想を、上手に人に伝えるためのコミュニケーション能力）の７つの力を身に付けることを目的としている。したがって、「起業基礎」は起業の為の実務的なハウツーを学ぶことを目的とはしていない。起業家精神(アントレプレナーシップ)を培うことにその目的がある。本校では起業家精神を端的には「自ら考え、行動できる態度」としたが、私たちが置かれている社会の中で、課題や問題を発見し、新しい視点からその解決方法を考え、それを具現化するまでのプロセスを体験的に学習することにより、自ら主体的に物事を考え、取り組む態度を身に付ける。ここに「起業基礎」の要点がある。

（２）教育課程全体の中での位置づけ

本校では「起業基礎」を教科「産業」の中の２年次の学校指定必履修科目として設置している。教科「産業」は本校のキャリア教育の中心を担うものであり、その目標は「産業に関する基礎的・基本的な理解や関心を高めさせ、産業と人間の関わりや、社会生活において産業が果たしている役割について広い視野を持って理解させるとともに、自らの体験を通して様々な問題に対処する力や、新たに創造する力を育てることにより、望ましい勤労観や職業観を育成する」ことである。教科「産業」は１年次では科目として「産業社会と人間」「産業理解」が設置されている。他節ですでに詳しい説明がなされてはいるが、「産業社会と人間」は、社会の中にどのような職業や仕事があるかを体験的に理解し、自分の能力適性を生かした進路選択を行うこと、「産業理解」は私たちの周りにある産業（人間が組織体系的に取り組む営み）を歴史的な観点からまた地域・世界的な観点から理解することにそれぞれ主なねらいがある。２年次の「起業基礎」は、それらの学びをさらに具体化させたプロセスを体験的に学習することによって補完するためのものとして位置付けられる。また、ここでの学びは３年次での主体的な進路選択、あるいは卒業研究での学究的態度へと発展するものである。

（３）今年度の実践の要点

今年度の起業基礎実践の大きな特徴は、年間を通して日本財団の「学校プロジェクト」(以下、日本財団と記す)

と連携して授業を実施できたことである。以下、本校起業基礎担当教員と日本財団のそれぞれの立場から、連携のねらいや今年度の実践の特徴について述べる。

1）起業基礎担当教員における今年度実践の要点と連携の意図

①脱文化祭的活動を

起業基礎は今年で7年目の実践になるが、例年秋ごろになると、昼休みや放課後に校内で物品を販売する起業団体が出てくる。そうした先輩の起業活動の印象が強いのか、近頃は単にモノを売ってお金を儲けるだけの文化祭の模擬店のような活動に終始する生徒が多く出てきた。しかし、起業基礎は、単なる起業体験やお金儲けを目指す授業ではなく、アントレプレナーシップの育成を目指す授業である。何がどれだけ売れたかという結果よりも、活動を通じて何を学んだかというプロセスの方が大切なのである。さらに、社会益や社会貢献を目指した起業活動を行うということが前提になっているが、生徒の活動のほとんどが校内での活動であり（学校社会という見方もできるが）、真の意味での社会益・社会貢献とはいえない。1年次の「産業社会と人間」および「産業理解」において、自己と社会についての認識を深め、2年次になり専門教科の学習も始まり、自己の進路意識の向上や職業・社会の認識も深化していく時期だからこそ、より実社会を意識した起業活動を行って欲しいと期待している。可能であれば積極的に校外に出て行って、地域や社会に貢献できる活動を展開してほしい。過年度の起業基礎実践をふりかえり、文化祭的な販売活動からの脱却と真の社会益・社会貢献を目指した活動をさせるための工夫・仕掛けが必要であると感じていた。

②日本財団学校プロジェクトとの連携

先述したような真の社会益・社会貢献を目指した活動を実施するための工夫を模索していたところに、日本財団より授業連携の打診を受けた。NPO活動について若い世代の理解を促すべく、Non Profitや社会貢献のあり方について考えさせる取り組みを学校現場で実践したいという思惑と起業基礎委員会の思惑が合致し、今年度から起業基礎において日本財団スタッフのお力添えを得ながら、授業を進めていくことにした。

本科目は、学年全員の生徒が受講し、複数の教員で担当するため、その運用においては逐次綿密な打合せが不可欠である。しかし、教員と日本財団スタッフ双方の都合や移動距離があるため頻繁に会議を持つことは難しい。そこで、基本的な連絡はメール・電話にて行うが、週1回の起業基礎委員会の際には、スカイプを利用して本校と日本財団を多元中継でつないだ。また、生徒の課題提出物および事業審査に用いる必要書類（事業計画書、資金計画書、施設・備品借用契約書）を E-mail にて提出させることにした。これにより、校外からも提出されたものの内容を確認することができ、日本財団スタッフと情報を共有することができた。このように情報通信機器を活用することにより、両者間の物理的な距離を克服するように工夫した。

③必ずしも経済的な利益（採算性）を求めない

日本財団スタッフとの協議を進める中で、基本的には例年通りの起業基礎の流れを踏襲し、例年以上に社会益や社会貢献について重点を置いた指導を行うことで合意した。また、Non Profitの視点を導入し、働くことはお金のためだけではないなどの多様な価値について考えさせ、モノを売ってお金を儲けるということだけではないことを明確に打ち出した。

例年起業基礎での活動は採算性のある活動にしか、融資を行っていない。しかし、今年度はNon Profitについて考えさせるなどの講義を行ってきているので、NPO団体のように企業としてではない活動をする生徒が出てくることが想定された。そのため、例年のように経済的な利益の追求を絶対とせず、社会的な利益の追求を至上命題とした。また、そのような今年度の取り組みによりマッチングさせるために、例年起業基礎で用いている用語を、以下のように変更した。

・企業→事業団体
（企業、NPOなど様々な活動を包含する表現に変更）
・企業登録→事業団体登録（同上）
・企画書→事業計画書
（記入項目は日本財団助成申請書を参考に作成）
・融資→融資・助成
（必ずしも返済されるとも限らないため助成を追加）
・融資審査→事業審査
（融資・助成のみではなく事業全体を審査するため）
・起業基礎銀行→UTSS財団
（助成の可能性を意識して財団化）

2）日本財団「学校プロジェクト」による連携のねらい

日本財団は、筑波大学附属坂戸高等学校(以下、筑坂)と連携し、一年間、全2年生対象の「起業基礎」科目にて、カリキュラムの構築や実際の授業での指導などを協働で実施した。

この取り組みは、日本財団が推進する「学校プロジェ

クト」の一環で行われたものである。「学校プロジェクト」とは、学校教育という場で、これからの社会の担い手に、「社会益」や「公益」を大切にする感覚と具体的な行動力を身につけてもらい、貨幣経済における金銭的な価値だけを求めるのではない働き方、生き方という選択肢を持ってほしい、という思いから始まった人材育成プロジェクトだ。これから社会に出る高校生を取り巻く環境は、不安の大きい、厳しい状況であることは否めない。少なくとも、かつてのように「大企業に入れば安泰」と言える状況ではなくなってきており、経済状況の行き詰まりや将来への閉塞感から、これまでの働き方や生き方に疑問を持つ人も増えている。

そのような中で「社会企業家」や「プロボノ」「ＮＰＯ」といった言葉に代表されるように、よりよい社会の構築に貢献することに価値を見い出す人々が増えつつある。そこで、公益活動の分野で長年活動してきた当財団の経験とネットワークを活かし、社会に出る前の多くの若者に、自分なりの社会を見る「物差し」「価値観」を身につけてもらうことをねらいとして、2009年からこのプロジェクトを始めたのである。

日本財団は、民間による公益活動の推進、社会変革をミッションとし、国内外で公益活動を行う団体への助成を行っている。また、奨学金事業をはじめとする長期的な視点に立った人材育成にも力を入れてきた。多様な社会問題に対応するには、政治や行政だけでなく、民の力が合わさって公の仕事をする必要があるという哲学のもと、世界のハンセン病制圧やアフリカの農業支援、マラッカ海峡の安全確保といったグローバルな事業から、福祉車両の配備、ホスピスプログラム、学生ボランティア育成などの国内を中心とした事業まで、規模・地域・分野とも多岐に渡る社会課題に取り組んでいる。

そんな我々にとっても、学校現場という領域は未知であった。結果として、当財団のシーズと筑坂のニーズが一致し、協働プロジェクトが始まったが、一年間という単位で協働プロジェクトができたことの意味はとても大きいと感じている。というのは学生に一つの新しい価値観を身につけてもらうことは、一度や二度の講義でできることではないからだ。したがって、筑坂でのケースを一つのモデル・スタンダードとして、今後につなげていきたいと考えている。

（日本財団）

２．学習の詳細

（１）学習の概要

今年度は日本財団と連携しての取り組み以外に年間計画（資料1）も昨年度までとは大きく異なった。昨年度までは２単位だったが今年度は「総合的な学習の時間（校外学習準備としての異文化理解学習）」と合わせて２単位（火曜６・７限）として行うことになった。この時間をある週は起業基礎で使い、ある週は総合の時間として使うというように、実質的には１単位として行うことに等しい。特に11月中旬から12月にかけては校外学習の直前でもあり授業を中断せざるを得ない。そこで不足する時間は夏休み中の活動により補うこととした。

以下に学期ごとの学習内容および年間での位置づけを述べる。１学期前半は講義を中心としてさまざまな起業のかたちを知ることを目的とした。例年と同様に吉田雅紀氏による「スキメシ」の講話だけではなく、NPOとは何か、Non Profitとは何かを理解する講話を行った。1学期後半は実際に起業家やNPO団体へのインタビューを夏休みに行うための準備期間とした。その後、夏休みに起業家とNPO団体へのインタビューを行い、その内容を８月７日の教員免許状更新講習にて公開授業として生徒に発表をさせた。

２学期は１学期の学習を受けて自ら団体を立ち上げて活動を行う期間とした。「起業基礎」における核となる部分である。生徒は同じ目的を持った仲間で集い事業審査合格に向けて起業活動を行ったのだが、営利目的だけではなく非営利を目的としてもそれが社会貢献に繋がるものならば認めた。また営利目的であっても例年と異なり何らかの社会貢献を求めた。事業審査を通過できずに活動できなかった団体がいたことは例年と同様だが、非営利目的の団体が例年に比べて多かったことは１学期の効果であり今年度の特徴でもあるだろう。また起業活動を進める中で、あるメンバーが仕事をしないとか目指す方向性が違うなどの理由からメンバーをクビにしたり、分離独立したりする団体があった。クビ宣告の際は、放課後遅くまで涙の話合いを行い、当該の生徒は最終的には自ら異動届に署名した。こうした人員の異動は例年起こるのだが、場合によってはその後の人間関係にまで引きずることもあるようだ。

３学期は自分たちの活動を振り返り、活動報告をして情報を共有することが目的である。活動ができた団体もその多くが企画書どおりに進まず、いくつもの問題点が見られた。しかし、活動の結果だけに一喜一憂するのではなく、なぜこのような結果になったのかと活動のプロセスを丁寧に分析し、課題や反省点を考えさせる。さらに、当初期待していた活動の成果がどれほど達成されたかも分析させる。PDCAサイクルのA（アセスメント＝評価）まで自分たち自身で行わせる。最後に、１年間の

「起業基礎」の授業を通して培いたい７つの力がどれだけ自分のものになったか、そしてそれらの力が今後どのような場面で生かされそうかを生徒自身に自覚してもらうため、活動をふりかえりながらレポートを執筆して１年間の学習が終了する。

（２）学習の詳細

１）１学期（講義、講演内容の概要説明）

第１回　５月11日　Non-profitとは「What is NPO?」

授業開きにあたり教員より授業オリエンテーションをおこなった。ここでは、授業のねらい、身につけてほしい力、学習の流れ、ヒアリング・評価についての説明、年間の学習計画を生徒に伝えた。後半は、日本財団の田代さんよりNPOとは何かということについてワークを交えた講義をしていただいた。

第２回　５月２５日　社会貢献のカタチ①

「Non Profitな働き方の形」

日本財団の富永さんより「世界で活動するNPOの仕事の現場」と題し、富永さんの撮ったたくさんの写真とともに、講義をしていただいた。世界各国で活動するNPOの仕事の現場から世界の問題のみならず、身の回りにある問題などの社会問題全般について生徒の関心が向くように工夫してもらい、さまざまな社会貢献のカタチを伝えた。また、後半では、日本財団の芳川さんに「社会に貢献する働き方のカタチ」と題した講義をしてもらい、社会に貢献する働き方として、NPOと企業の違いと共通点について講義していただき、社会貢献、問題解決のための起業に際して重要な起業家精神について生徒に考えさせた。

第３回　６月８日　社会貢献のカタチ②

「NPOの仕事と現場」

「国際協力」「海洋」「国内利益」など「Non-Profitな仕事」の最前線で働く人々のライフストーリーに焦点を当てて、目の前で生起している解決しなければならない社会問題、問題解決のための具体的な行動、そこで働く人々の想いなどを生徒に伝えた。なお、本時の内容の作成にあたって、日本財団の本多さん、樋口さん、山下さんには、長時間をかけてNPO職員の方々への取材をしていただいた。皆様、ご協力ありがとうございました。

第４回　６月１５日　社会人講話

「起業家精神(アントレプレナーシップ)とは」

科目開発以来、毎年来校していただいている株式会社あきない総合研究所代表取締役の吉田雅紀さんに講演していただいた。「スキメシ（好きなことでメシを喰らう)」ということについて、実際の起業家としての生き方と起業家精神の実際について話していただいた。講演のあと、起業の実際、苦難を乗り越える方法など２学期に起業活動を控えている生徒から活発な質問が出た。

第５回　６月２９日　多様な価値を学ぶ

「Non Profitな仕事の価値って？」

起業家やNPOの運営者に取材に行くことを夏休みの課題とした。その準備として、取材の手法や質問の仕方、心構えなどについての講義を日本財団の田代さんにしていただいた。講義後、インタビューに行くグループ毎に生徒が集まり、各グループで役割分担、日程の調整、質問作りを行わせた。取材のアポイントメントなどは生徒自身に先方との交渉で決定させた。以降７月９日も取材のための準備時間とし、７月１３日は取材の成果を発表するためのポスター作りについて説明した。生徒は、インタビュー後にグループで集まり、ポスターを制作し、８月７日の教員免許状講習公開授業においてポスターセッションに臨んだ。初めてのポスターセッションで、発表時間も短時間しか取れなかったのだが、生徒自らが立ち上げた団体かのように、職員の方々の想いや目指す社会像について熱く語っている姿が印象的であった。

２）２学期

①日本財団会長笹川陽平氏講演会

「若者よ、世界へ翔け！」

２学期からはいよいよ生徒による起業活動が始まる。それに先だって今年度起業基礎の実践で連携させていただいている日本財団の笹川陽平会長よりご講演をいただいた。講演は、起業や社会に出る前に必要な心構えなどについて、生徒との対話形式で行われた。笹川会長は「起業基礎は失敗を経験する授業だ」と前置きをし、「皆さんには若さという最大の特権がある。若い時は失敗が許される。成功している多くの起業家も、大会社の社長もたくさんの失敗から学んだ。強い精神力を養ってこそ成功するものだ。上手くいかなかったからと言ってあきらめず、必ず成功する、しなければいけないという信念と忍耐力で勝負してほしい。」と起業活動に入る生徒たちに心強いメッセージを送ってくださった。

②グルーピング、事業団体登録

２学期は、事業団体を結成し実際の事業活動実践の期間となる。事業の立ち上げに際し、事業のアイデアを出

す体験を持ってもらうことを意図して、「アイデアを出そう」という課題を課した。生徒には「身近な社会的問題」、「問題の解決方法」、「企画名称」を E-mail にて提出させた。また、全員分のアイデア一覧（資料２）を配布することで、企画立案やメンバー集めの際の参考にしてもらうよう期待した。しかし実際のグループ決定には、起業アイデアよりも生徒同士の仲間関係の方が優先されてしまい、未成熟な成長段階の高校生にとってはこれもやむを得ない事情であろう。結果、各団体の従業員数は２名～１０名の規模のものとなり、事業団体登録数は３２団体となった（資料３）。

２学期の授業の流れ説明にあたり、各部署担当教員から「起業活動の流れと活動の条件」についてガイダンスを実施した。

○団体登録について〔つくさか法務局〕→ 事業計画書を提出して団体登録を行う。

○施設使用や校外での活動 → 施設使用料は許可制であり、団体で交渉する。校外での活動は歓迎するが、事前に相談をした上で行うこと。

○食品企業に関する説明〔つくさか保健所〕 → 講習を受講し、衛生責任者資格試験を受験合格と保菌検査の実施を条件とする。

○事業審査、融資・助成について〔UTSS財団〕 → 実際に活動を行うためには、事業審査に合格することを条件とする。

③食品企画団体への扱い

食品衛生について高い意識付けを行うため、起業基礎内に独自の「食品衛生責任者資格試験」を設け、食品を扱う団体の生徒全員に受験を義務付けた。試験問題は本校の家庭科教員が作成し、一般社会で実際に行われている「食品衛生責任者」講習（食品衛生・衛生法規・公衆衛生）のうち食品衛生についてとりあげ出題した。生徒には独自のテキストを用意し、また事前に２時間の講習を実施した。各団体の生徒全員が合格することにより、つくさか保健所より合格証を交付し、これを事業審査の必要書類の一つとした。テストは○×回答式で、８０問中７０％を合格ラインとした。問題内容を少しずつ変更しながら、計４回実施した段階で、８団体６６名の生徒全員が合格した。

④事業計画書等の書面作り

事業審査に進めるための「事業計画書」（資料４）の記入項目は、事業の名称・企画立案の背景や社会的課題・事業の目的・事業のターゲット（受益者）・セールスポイント・事業内容・事業実施スケジュール・期待される成果などを必須とした。また、事業に必要な経費を算出し「資金計画書」（資料５）にまとめ、融資・助成希望額を示す。また、学校内の施設・備品を借用する場合は「施設・備品借用契約書」を作成し、担当教員と借用契約を行う。その他、事業審査に必要なプレゼン資料なども随時作成させた。

⑤事業審査

事業審査では、生徒が企画した事業の内容について担当教員が審査し、実施するに値する事業に対しては審査の通過と融資・助成の決定を、実施するに値しない事業に対してはその事業の課題や改善点を指摘する。担当教員は２名以上の複数名でグループを作り、審査を担当した。本年度は各審査教員グループの中に日本財団のスタッフを最低１名含むようにして審査を行った。

次に実際の審査手順について説明する。審査を希望する生徒団体は、団体登録を行った際に発行された団体登録証、その後に各団体で作成した事業計画書、資金計画書、施設・備品借用契約書、食品衛生責任者講習合格書（食品企画のみ必要）を揃えて、審査受付を行う。審査受付は、授業時間当日に書類と共に行う方法と、それに加えて今年度は、E-mailを利用した事前予約受付も実施した。事前予約受付では、あらかじめ指定したE-mailアドレスに、上記書類のうちの事業計画書、資金計画書、施設・備品借用契約書を添付して、予約するという形が取られた。こうすることで、審査担当者が事前に内容に目を通すことが可能になり、より効果的な助言を与えることができた。

当日または事前の受付が済むと、教員側では、複数ある教員審査グループのいずれかに審査を割り振り、そのグループに各書類のコピーが渡され、審査がスタートする。生徒が団体登録を行った段階で、その際に用いられた事業計画書がコピーされて各教員に渡されているため、多くの場合、審査をする段階である程度、該当する団体の事業内容について教員は把握している。

実際の審査では、まず審査を受ける団体が教員に対して事業内容についてのプレゼンテーションを行う。その際、プレゼンテーションは基本的には事業計画書や資金計画書に書かれた内容について口頭で説明する形になるが、団体によってはパワーポイントを用いて行ったり、モノを配布したり販売したりする団体は、その見本などを提示することがある。団体によるプレゼンテーションが終わった後、次は審査教員による質疑が行われる。質疑が終わった後、団体を一度退出させた上で、審査教員

による審議が行われ、審査の通過・不通過が決められる。そして最後に、生徒団体に対して、審査結果とその理由が伝えられる。（その場での審議が難しい場合、審査結果を保留にした上で、放課後に行われる起業基礎委員会において審議する場合もある。また、実際の審査内容については、資料６を参照）

本年度は、審査にあたって、次のような審査の観点を準備し、教員で共通理解を図った。

問題設定	A	社会のニーズを適確に捉えているか
	B	事業目的は明確か
公益性	C	公益性はあるか
整合性	D	事業計画は具体的で実現可能か
	E	目的達成のための計画として適切か
	F	資金計画は適正か
	G	成果目標は明確か
団体	H	構成員の役割分担は明確で適確か
	I	構成員のやる気、積極性はあるか

活動期間中は、授業日の放課後に会議を開き、事業審査での様子（どの団体の審査を行ったのか、どのような事業内容だったのか、採否とその理由は何か、生徒にどのようなことを伝えたのか、次の審査に向けての引き継ぎ事項は何かなど）を報告し合うことで、次に審査があった場合に、どの教員が審査を行ってもスムーズに審査が進むように心がけた。

最後に審査に関する状況についてであるが、団体登録を行った31団体のうち、30団体が１回以上の審査を受けており、実施期間中に最高で５回の審査を受けた団体があった。生徒の審査受付数や審査時間等が当初の計画と異なってしまったため、放課後等を利用して追加の審査機会を設け、その結果、述べ回数で74回の審査を実施している。これは１団体あたり平均で 2.4 回の審査を受けていることになる。審査の結果、９団体が審査を通過し、審査を通過した団体は平均 3.1 回の審査を受けていた。

（３）学習の評価

次に学習の評価についてである。「起業基礎」では次のような観点で学習の評価を行っている。（この評価項目は年度当初に生徒提示している）

a．毎回の授業ワークシートの記録状況
b．ヒアリングの結果
c．各学期のふりかえりシートの内容
d．夏休みの課題（提出・内容）
e．企画書の提出・内容
f．企画審査をうけたか
g．起業活動ができたか
h．起業活動状況
i．事業報告書の提出
j．事業報告会の評価

それぞれの評価の観点の概要について次に述べる。ａについては、１学期に関しては、各講義や講演に関するワークシートや感想文等、２学期に関しては毎授業時間の最後に書く、その日の活動をふりかえり、次の授業の予定について考えるワークシートを指す。ｂのヒアリング、ｃのふりかえりシートについては後述する。ｄについては、夏休みに行った、NPO・起業家インタビューに関連する課題を指す。ｅ～ｈについては、２学期の実際の企業活動に関する評価を指す。ｉ、ｊについては、３学期で行うまとめの活動を指す。

このような「起業基礎」の評価には次のような特徴がある。

①個人レベルの評価とグループごとの評価があること。

ａやｂ、ｃのように、生徒各個人ごとにことなる評価がつけられる観点もあれば、ｅ～ｈにあるように、グループ（事業団体）ごとにまとまった評価がつけられる観点もある。このことは、個人ごとに授業に対して取り組まなければならない一方で、グループで協力して授業に取り組まなければならないことも意味する。

②評価の方法が多様であること。

ａ、ｃなどは、個人ごとの提出物（書くこと）の内容で評価しているが、ｂなどは個人ごとの表現（話すこと）の内容で評価している。ｅ～ｈなどは、グループごとのパフォーマンス（活動結果）の内容で評価している。このように多様な評価方法で評価することは、個人ごとに得意・不得意な面を見出すことや、特に得意な面を伸ばして行くことへの意識に繋がる。

最後に、「起業基礎」独自の評価である、ｂヒアリング（およびｃふりかえりシート）について説明する。

まず実施概要についてである。ヒアリングは、１学期の期末考査に１回、２学期の起業活動の途中に１回、活動終了後に１回行われている。ヒアリングは、各クラスごとに５名のグループを作り（５名×８グループができあがる）、５名からなるグループを集団面接するという形で実施される。５名のグループは生徒がランダムになるように教員側が設定する。８グループ一度にヒアリン

グができるように、A～Hの８つのブースを用意し、それぞれのブースを教員１名が担当する。各クラスごとに、８グループのヒアリングを実施、４クラス分で合計４回転して実施される。実施していないクラスは、ｃふりかえりシートを行う。（実施の順番は輪番にした上で、実施しているクラスとしていないクラスの生徒同士が接触しないように配慮している。どのように教員が動いているかに関しては、資料７を参照。）

次にヒアリングの内容についてである。各回ともに２つまたは３つからなる質問によってヒアリングは展開する。５名の生徒に一つずつ質問をし、それぞれの生徒が回答するという形でヒアリングはすすめられる。教員は、生徒の回答や態度に対する点数チェック表に基づき、質問ごとに点数をつけていく。（ヒアリング内容およびその評価の仕方については、資料８および資料９も参照）

３．生徒アンケート結果

今年度はこれまでの科目開発によって考えられた「生徒に身に付けさせたい７つの力」を元に、各能力に関する質問項目を設定した。これらの質問項目について、各学期末に実施する振り返りアンケート（資料１０）の中でその伸びを分析するとともに、今年度のNon profitな考え方を重視した授業内容を振り返り、同じ質問項目のアンケートを実施したH20年度との比較を行った。

（１）実施概要

①対象：　２年次１６０名

②調査時期：３回

　１回目：平成２２年度１学期末　６月２２日

　２回目：平成２２年度２学期末１１月２６日

　３回目：平成２３年度３学期末　３月　１日

③質問内容：３回ともに同じ内容で質問を行った。２・３学期はグループによる起業　活動が始まったため、９）の質問を加え、とてもよく当てはまる：５、全く当てはまらない：１として５段階で評価させた。

（２）結果及び考察

	肯定率
５）多くの人に共感されるような起業アイデアを考えることができた。	27%
８）自身の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとるなどの行動ができた。	35%
11）自分の考えをわかりやすく表現できた。	43%
12）自分の考えを筋道立ててまとめることができた。	45%

１学期は、向上を目指す７つの力のうちの、問題発見力、アイデア力、企画立案力、実行力、プレゼンテーション能力に関する項目において肯定率が５０％に届かなかった。これらは、実際に活動してこそ得ることができる力であると考えられ、Nonprofitな考え方や実際の活動に関する講義を聞く時間が主だったことが原因と考えられる。

	肯定率
３）お金の持つ「価値」について改めて考えることができた。	78%

一方、今年度より取り入れた下記の項目において、肯定率が８０％近くに及んだことは、１学期のNonprofitな仕事に関する講義が、今まで「お金がすべて」や「利益が上がってこその起業」と考えることが多かった生徒たちの意識改革につながった結果であると考えられた。

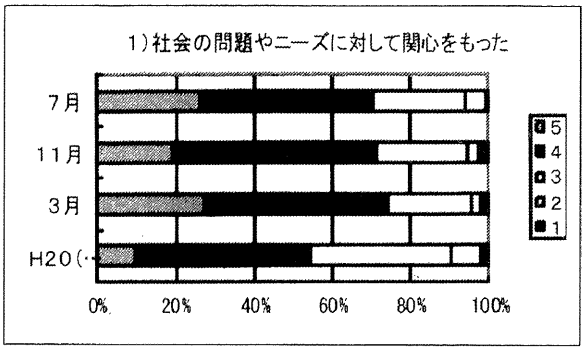
以下の項目は１学期（７月）から３学期（３月）にかけて肯定率が上昇した項目である。

	7月	11月	3月
1)社会の問題やニーズに対してて関心をもった。	71%	71%	74%
5)多くの人に共感されるような起業アイデアを考えることができた。	27%	48%	49%
6)社会に対する不満を解決に向けて考えることができた。	53%	53%	55%
8)自分の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとる行動ができた。	35%	52%	55%
9)グループの中で自分の役割を見つけられた。		72%	75%
10)協力してものごとを実行する態度が身についた。	53%	71%	71%
11)自分の考えをわかりやすく表現できた。	43%	51%	51%
12)自分の考えを筋道立ててまとめることができた。	45%	47%	50%

夏休みにおこなわれたNPO団体へのインタビュー活動とその結果発表、２学期におこなわれた起業活動によって、生徒が実感を持ち始めた。アイデアの具現化に向けてグループで協力して物事にあたる姿勢、アイデアを実現するための方法を試行錯誤する姿勢や適材適所の役割分担を考える力が身につき始め、自分の責任を意識して積極的に活動し始めた生徒も多い。また、企画を通すための審査を繰り返すうちに、徐々にではあるがプレゼンテーション能力も向上してきたと感じたようである。実際、審査に携わった私たち教員も、生徒たちが、昨年より、今年、最初の事業審査よりも次の事業審査と、段階を踏む事に、どのように話したらよく伝わるかを考え始めたと成長を感じている。

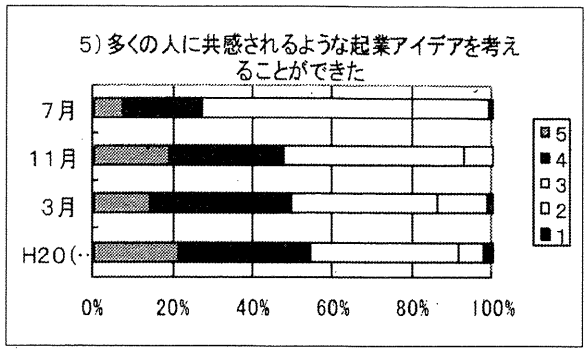
今年度は日本財団の多大な協力を得て、当初から「儲けを出す起業」よりも「社会益を出す起業」ということに重きをおいてきた。授業内容の変更による影響はどこ

に見られたかについて、同じ質問項目のアンケートを実施した２年前（H20年度）の結果と比較したところ、以下の項目で今年度の肯定率が高く、統計的にも有意であった（Mann-Whitney U検定　p<0.05）。日本社会が抱える課題について真剣に考えたことは、今年度の授業のねらい通りと言って良いだろう。



また、実際には「社会益」を目指すだけでは起業が困難であることから、今後はこうした理想に反する側面も考えさせていかなければならない。それを受けて生徒の姿勢がどのように変容するか、活動を見守り、分析していくつもりである。

一方で、今年度は授業時数が減った関係で、実際の起業活動が２学期からになったため、「アイデアを出す」ことに関しては、２年前よりかなり肯定率が低く、統計的にも有意差があった(Mann-Whitney U検定p<0.05)。年度末の肯定率も２年前のそれには及ばず、「アイデア力」を向上させるためには、もう少し早くから起業活動を始める必要があったと思われる。



起業できたか否かによって、生徒の達成感等に違いが出ていないかを調べるために、起業できた団体の生徒と起業できなかった団体の生徒を比較した。

７月の平均値に関しては、ほとんどの項目で起業した団体の生徒の方が高く、以下の項目に関しては有意に高かった（Mann-Whitney U検定　p<0.05）。

Ｑ２）自分の考えや興味を見つめ直すことができた。

Ｑ13）起業基礎の授業は自分の役に立った。

１学期の様々な講義を受けて得たモチベーションの高さが２学期以降の起業活動に生きたようである。

授業が終了した３月の平均値に関しては、全ての項目で起業できた団体の生徒の方が値が高く、以下の項目に関しては有意に高かった(Mann-Whitney U検p<0.05)。

表　起業した団体と起業できなかった団体の比較　　平均値とＵ検定結果

		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8
7月	起業した	4.10	4.36	4.07	3.88	3.14	3.71	3.74	2.93
	起業できなかった	3.82	3.96	4.09	3.74	3.14	3.49	3.59	3.28
	U検定　棄却率	P=0.104	P=0030	P=0.966	P=0.448	−	P=0.181	P=0.489	P=0.070
3月	起業した	4.06	4.10	4.08	3.94	3.75	3.75	4.08	3.83
	起業できなかった	3.90	3.84	3.87	3.64	3.37	3.53	3.65	3.58
	U検定　棄却率	P=0.158	P=0.041	P=0.111	P=0.054	P=0.027	P=0.175	P=0.003	P=0.093

		Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
7月	起業した		3.43	3.48	3.62	4.40	4.10	4.40
	起業できなかった		3.62	3.38	3.45	4.04	4.09	4.16
	U検定　棄却率		P=0.292	P=0.541	P=0.319	P=0.030	P=0.911	P=0.135
3月	起業した	4.31	4.34	3.79	3.66	4.13	3.64	3.87
	起業できなかった	4.11	3.95	3.45	3.48	3.62	3.59	3.79
	U検定　棄却率	P=0.109	P=0.012	P=0.035	P=0.250	P=0.003	P=0.700	P=0.556

2）自分の考えや興味を見つめ直すことができた。
7）自分の興味・関心に対して積極的に行動することができた。
10）協力してものごとを実行する態度が身についた。
11）自分の考えをわかりやすく表現できた。
13）起業基礎の授業は自分の役に立った。

特にQ10に関しては、7月の時点では起業できなかった団体に所属している生徒たちの方が値が高かったにも関わらずの結果である。起業するためにはグループ内での役割を明確にし、協力することの大切さを身をもって体験したようである。実際の起業活動を観察していても、それぞれの分担に対する責任感が芽生えていた。また、有意差は出ていないものの、Q８に関しても、起業できた生徒たちは１年間で大きく伸びた（Wilcoxonの符号順位和検定　P〈0.05）。起業することによって、問題解決能力も向上したと感じることができたと言えよう。

8）自身の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとるなどの行動ができた。

アンケート結果の中には肯定率が低下した項目もあった。これは、最初のうちはわからずに良い自己評価をしていた部分が、実際の活動を経験することで自己評価を下げる典型的なケースとも言える。また、忙しく、面倒と思うであろう活動の中では、今自分たちがどんな力が身に付いているのか、すぐには感じられない部分もあるだろう。総じて、一つ一つを見てみると、ほとんどの項目で評価が上がっていることから、生徒たちは確実に意識を変化させていると考えられる。来年度の卒業研究において、身に付けた力を大きく発揮してすることを期待する。

4．おわりに～まとめにかえて～

今年度の起業基礎実践は、日本財団との連携なくして実現は到底できなかったであろう。まずは、この場を借りて御礼申し上げたい。

今年度は文化祭的活動からの脱却と真の社会益・社会貢献の実現を目標に掲げて、年間指導計画を構想した。その内容・成果はすでに述べたとおりである。

一方で、課題も多くあった。２学期からの起業活動では、生徒は我々教員の期待に応えてくれて、多くの団体が社会的な利益を追求した事業を企画立案してくれた。そして実際に学校外に出向いて活動を行う企画が大半を占めていた。この点は、１学期の取り組みの成果といえるだろう。ところが、実際に外部団体に活動の許可を得るための交渉をしてみると、「都合がつかない」、「高校生は受け入れられない」など種々の理由により断られることが多かった。そのため、学校外での社会貢献活動を断念して、他の実現可能な活動に切り替えざるをえなかった。このように想像以上に高い実社会の壁に直面して悔しい想いをした生徒も数多くいた。教員サイドでは事前に外部団体へ根回しなどを行うことは一切せず、生徒自らが活動の場を開拓していくようにさせた。しかし、「高校生だから･･･」という理由は、事情は重々承知しているが納得できるものではなく、教員側としても生徒が活動できる場を何らかの形で整えてあげられればよかったのかもしれない。多くの生徒が活動できるような状況が整っていれば、生徒の学びの質も改善できたかもしれない。

今年度の２年次生は本校総合科学科16期生で、ちょうど1994年の総合学科誕生の年に生まれた子たちである。総合学科開設から17年が経過し、第三の学科としての総合学科の教育システムはとうに確立している段階なのに、年々総合学科らしい生徒は減少しているように思う。せっかく総合学科高校で学んでいるのだから、普通科高校や専門高校ではできない学びを存分に満喫して欲しいと思う。また、その中で専門的な教養・技術や自分独自の視点・発想を身につけ、社会の発展に役立てて欲しい。こうした中で、本校２年次学校設定必履修科目である「起業基礎」は、そのような学びを支える重要な役割を担っている。１年次の「産業社会と人間」での学びを起業活動という形で具現化させ、その経験から得た７つの力は３年次の卒業研究など様々な場面に生かされていく。今年度、特に重点を置いた社会益・社会貢献の視点は、卒業研究を単なる調べ学習に終始することなく、社会の役に立つ高次のレベルの研究にするためには、不可欠な視点である。次年度以降も、起業基礎で培った７つの力を駆使して、様々な局面で力を発揮して欲しいと期待している。

＜日本財団スタッフから１年間の取り組みをふりかえって＞

１年間という長い期間、起業基礎の授業に関わるということは、通常我々のような教育現場の素人にとっては“ありえないこと”と言っても過言ではないという思いでいる。と同時に「挑戦」でもあった。

偶然、筑波大学附属坂戸高等学校と日本財団の「学校プロジェクト」の目指す方向が一致したことが一番の要因ではあるが、海の物とも山の物ともわからない我々を受け入れてくださった今野先生をはじめ、２年次担任団の先生方の寛容な心（もしかしたら賭けだったのかもしれないが）がなければ実現できなかった。この場を借り

て深く感謝申し上げたい。

さて、１年間を振り返ってまず最初に言えることは「社会益」や「公益」という価値観について生徒たちにどのくらい伝えられたか、また伝わったとしてもそれが彼らの新たな価値観に繋がったのかはわからない、というのが正直なところだ。しかし手応えと期待はある。

１学期の授業ではNPOと企業の区別がつかない生徒が多くいた。そんな彼らが夏休みには、グループにわかれてNPOを訪問、現場で働く人の話しを聞き、体験した。この段階を経て２学期には「社会益を取り入れたプロジェクト」を企画立案した。その時に彼らが提案してきたプロジェクトは我々が期待したとおり、社会益を意識したものが多くあった。

これらのことを振り返ってみると我々が伝えたい価値観について、ある程度は生徒達にインプットできたのではないかと思う。

勝手な解釈かもしれないが、こういった授業は「成果」をすぐに見いだすのは難しいのではないだろうか。彼らが進路を考えるとき、あるいは卒業して社会人になり、社会の仕組みが実際にわかってきた頃にヒントになることもあると思う。その時に彼らが社会のため、地域のため、人のためにこの起業基礎の授業で培ったものをアウトプットしてくれたらこの上ない幸せである。

我々の願いは、我々が蒔いた種が大きく育ち、一人ひとりが日本の社会を支える礎になることである。そのためにより良いカリキュラムを作り、様々な学校と連携できるように努力していきたい。

（日本財団）

資料 1

平成２２年度　起業基礎　年間計画

担当者：岡・今野・小澤真・初谷・吉岡・工藤雄・吉備・田中・後藤　／　日本財団（田代・富永・芳川）　（火6、7限　14:15～15:55）　2011年1月25日現在

学期	月	日	曜日	時間	主題	単元	各時限の内容 6時限	各時限の内容 7時限	スタイル	備考
一学期	5	11	火	2	Non-profitとは	What is NPO？	起業基礎オリエンテーション	授業「Non-profitな仕事～お金のためじゃない働き方～」	全員@多目的室	
	5	25	火	2	社会貢献のカタチ①	Non Profitな働き方の形	授業「社会に貢献する働き方のカタチ」	授業「写真で見る世界の現場と仕事」	全員@多目的室	
	6	8	火	2	社会貢献のカタチ②	NPOの仕事と現場	「国際協力」「海洋」「国内公益」の各分野から現場で働く職員による出前講義		全員@多目的室	
	6	15	火	2	社会人講話	起業家精神（アントレプレナーシップ）とは	株式会社あきない総合研究所代表取締役　吉田雅紀氏講演　「好きなことで、メシを食う！」		全員@多目的室	
	6	22	火	2	ふりかえり		ヒアリング	ふりかえり	B館、各HR教室	
	6	29	火	2	多様な価値を学ぶ①	Non Profitな仕事の価値って？～取材してみよう～	取材の手法～質問づくり、心構え～	取材後のまとめ方について	全員@多目的室	
	7	9	金	2	多様な価値を学ぶ①	Non Profitな仕事の価値って？～取材してみよう～	インタビュー質問づくり		全員@多目的室	
	7	13	火	1	多様な価値を学ぶ①	Non Profitな仕事の価値って？～取材してみよう～	ポスター作成、ポスターセッションについて		全員@多目的室	
夏休み	7月下旬～8月上旬			10	多様な価値を学ぶ②	Non Profitな仕事の価値って？～取材してみよう～	身近にある「社会貢献な仕事」を知ることを目的に、取材先を探すところから、実際の取材、レポートのまとめまで実施		グループ、もしくは個人作業。	
	8	7	土	1	多様な価値を学ぶ③	Non Profitな仕事の価値って？～取材してみよう～	取材成果発表会　ポスターセッション		全員	教員免許状更新講習授業公開
二学期	9	2	木	1	起業活動①		2学期起業基礎の流れ確認、アイデアを出そう2		全員@多目的室	
	9	3	金	1	起業活動②		起業仲間探し		全員@多目的室	
	9	7	木	2	多様な価値を学ぶ④	Non Profitな仕事の価値って？	日本財団笹川会長講演会		全員@多目的室	
	9	14	火	2	起業活動③	実践！起業活動 - PLAN & DO -	how to 起業、事業計画書の書き方	テーマ、ミッションの設定/事業計画	前半：全員@多目 後半：グループ	
	9	28	火	2	起業活動④	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査	事業計画	グループ	
	10	5	火	2	起業活動⑤	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査	事業計画／審査	グループ	
	10	12	火	2	起業活動⑥	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査	事業計画／審査	グループ	
	10	19	火	2	起業活動⑦	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査	事業計画／審査	前半：全員@多目 後半：グループ	
	10	26	火	2	起業活動⑧	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査／実施	事業計画／審査／実施	グループ	
	11	2	火	2	ふりかえり		ヒアリング	ふりかえり	B館、各HR教室	
	11	4	木	1	起業活動⑨	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査／実施	事業計画／審査／実施	グループ	
	11	9	火	1	起業活動⑩	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査／実施	事業計画／審査／実施	グループ	
	11	11	木	1	起業活動⑪	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査／実施	事業計画／審査／実施	グループ	
	11	18	木	1	起業活動⑫	実践！起業活動 - PLAN & DO -	事業計画／審査／実施	事業計画／審査／実施	グループ	
					起業活動実施期間					
	1	25	火	2	活動の総括①	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	報告書の作成／報告会の準備		グループ	
	1	27	木	1	活動の総括②	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	報告書の作成／報告会の準備／研究大会準備	[redacted]	グループ	
	2	1	火	2	活動の総括③	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	報告書の作成／報告会の準備		グループ	
	2	15	火	2	活動の総括④	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	起業活動報告会（研究大会発表グループ選出）		全員@多目的室	
	2	17	木	1	活動の総括⑤	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	研究大会準備	[redacted]	全員@多目的室	
	2	24	木	1	活動の総括⑥	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	研究大会準備	[redacted]	全員@多目的室	
	2	25	金	2	活動の総括⑦	実践！起業活動 - CHECK & ACTION -	第13回総合学科研究大会		代表者@多目的室	
	3	1	火	2	ふりかえり		ヒアリング	ふりかえり		
				61						

起業基礎６－Ｂ－１

アイデアを出そう！　Ｂ組(1～20)一覧

2010年6月22日現在

クラス	番号	氏名	③ 企画名称	① 気になる身近な社会問題	② ①の社会問題の解決方法
B	1		あつぃ	立っても歩いても座っても何をしても暑い今日この頃。暑さのせいできっと何人かは授業中も集中できないでいるはずです。体調も良好を保たなくてはならない時期だと思うので、このままではいけないと考えました。	いちばん手っ取り早い方法はクーラーや扇風機を設置することですが、それでは地球環境に悪いし、維持費もかかります。打ち水をしたり、学校内に植物を置いたり、風通しをなんとかしてよくすることがいいと思います。
B	2		みんなで築く！ゴミ箱タウン！	それが原因で辺り一面にはゴミが散乱していて、悪臭が漂ったり、カラスが集まって、近辺住人が迷惑をしている。地域清掃等を実施しているが、人員もあまり集まらずあまり効果が得られない状態である。	回収を付近の中学校・高校が行う。回収を2～3週間にして清掃時間に行えば、効率的に良い。ゴミ箱を設置すれば、悪臭やカラスの問題が解決し、地域へのエコ活動につながり、環境への意識や環境活動が高まる。気持ちの良い生活が出来る。
B	3		制服の正しい姿	僕が、気になっている社会問題は、筑波大学附属坂戸高等学校の服装と頭髪についてです。2年生に進級してから、気がゆるんで服装と頭髪の乱れがひどくなってきていると、僕はとても思います。	筑波大学附属坂戸高等学校の服装と頭髪の解決方法は、学校の至る所にポスターを貼ることです。服装と頭髪についてのポスターを生徒たちが作って貼ることによって、制服と頭髪がみだれている人も、自分で気がついて直していくと思います。
B	4		盗難防止対策	筑坂校内で、体育の授業などの、貴重品を置いていくしかない授業がある日に、時々、制服のポケット・鞄の中・机の上・机の中・鍵を付けていないロッカーに入れてある貴重品の盗難が発生することがある。	各生徒が、ロッカーに貴重品を入れ、鍵を付ければ良い。鍵を買う余裕の無い人も居るので、ロッカーをもともと鍵付きのものにする。鍵は、他人に鍵を勝手に抜かれるのを防止するために、数字を合わせるタイプにする。
B	5		ゴミゼロ大作戦	最近、街中でゴミを捨てることが見かけるようになった。僕が住んでいる浮間では年一回にボランティア清掃をするが、ボランティア清掃以外の時期になると、ゴミをゴミ箱に捨てず、路上に捨てるケースが多い。このままでは、街や川、公園の雰囲気がより一層悪くなってしまう。	ボランティア清掃活動を月に一、二回、できれば週に一回する。だが問題が人が集まるのか、途中でボランティア清掃活動を辞退する人がいることである。そこで毎回、清掃活動終了後にお菓子などの報酬制度を作り、人が集まるような宣伝効果を出す。しかし、いくらゴミ拾いをしてもゴミを捨てる人ことが多い、そこで二度ゴミを捨てないように、ポスターを製作する。そして、できれば坂戸市と協力をする。
B	6		自転車安全化計画	僕が気になっている社会問題は道路の歩道を走っている自転車である。僕の住んでいる地域はよく整備されていて歩道も広く自転車も通行出来るほど広く幅が取ってある。しかし駅周辺の商店街などは非常に歩道が狭く通行人が多いのにもかかわらず自転車で歩道を走行している人がいて危険ではないかと考えている。	まずは市政による土地の確保などにより自転車専用レーンを増設する事で事故を軽減させる。あとは子供に対する徹底的な指導も行っていき事故の芽を摘みとっていき、また高齢者には街の公共交通機関(高齢者利用サービスなどを行う)を利用させ自転車の利用を控えさせたりすれば事故も低減するのではと考える。
B	7		社会問題なのかはわからんが涼しくなりたい今日この頃	自分が気になっている社会問題は、筑坂の教室にクーラーや扇風機などの冷房器具がないことである。この暑い時期に冷房器具のない教室で授業をうけることは辛いものがある。また勉強効率も著しく低下すると思われる。	この問題を解決するためには、まず全校生徒からお金を集め冷房器具を購入する。電気代は生徒から集金または国の援助を受けることで解決すると思われる。それが無理ならヤマダかどっかで個人的に購入する強行手段をとる。
B	8		C館渡り廊下に屋根を	筑坂のC館への渡り廊下には屋根がないため、雨の日は、傘を使わないといけない。傘がないときはわざわざ一階に降りないといけない。前の授業が長引くと遅刻につながってしまう。移動教室を時間に余裕を持ってできない。	傘がない人のために、渡り廊下のドアのそばに備え付けの傘を置く。できれば集金・募金などでお金をためてつくる。汚れてしまうから、C館渡り廊下の掃除当番をつくり生徒で交代ごうたいで掃除する。
B	9		部室前美化持続計画	最近、部室の前がとても通りづらくなっている。壊れたロッカーからはみ出している針金は危険で、ゴミも置かれている。しかも雨が降るとコンクリートブロックの上しか歩くことができないため、道が細くとても通りづらくなっている。	月一回、各部活動で外に部室のものを置いてないかチェック(部活動ごとの当番制)し、チェックにひっかかった部活は速やかに片付ける。壊れたロッカーは危険なので処分する。コンクリートブロックは、生徒会に提案し、もうすこしコンクリートブロックの幅を広げる。
B	10		南の島から～黒糖で現代っ子を変える!?～	最近では子供が親や友達を殺す、犯罪、暴れる、無気力、ニートなどがニュースやワイドショーで取り上げられている。昔は今よりずっと少なかったという「子供の問題行動」がなぜこんなにも増えてしまったのかが気になっている。	私は子供が問題行動を起こす原因として食生活が一番の原因だと考える。精製された白砂糖の取り過ぎやカルシウム不足が脳に深刻な影響を与えるため、子供たちに白砂糖の代用となり、同時にカルシウムを多く含む食品として黒糖を摂取してほしいと考える。
B	11		株式実行ゲーム	最近、起業基礎で、生徒が色々なアイデアを出して、それを実行に移そうとしている。しかし実行にうつすためには資金が必要で、その資金が学生である以上限られてくる。さらに学校からの支援もたかが知れている	私が証券会社を立ち上げ、株の取引を行えば良いのではないかと思った。そうすれば、皆の資金巡りも良くなるし、生徒全体が協力して企業基礎を行える。金額の幅が広がれば、アイデアの幅も広がるということになる。
B	12		STOP!DQNNAME＼(ｏ)／	DQN(ドキュン:主に非常識で野蛮な人達の事)ネームについて。最近の小さい子供達には変わった名前の子がたくさんいる。その中には常識的にありえない名前の子もいる。「戦争(せんそう)」、「愛人(はあと)」、「黄熊(ぷう)」、「光宙(ぴかちゅう)」がその例である。漢字の真ん中にカタカナが入っていたり、女の子なのに「太郎(たろう)」とつけられている子もいるらしい。その親たちは真面目に考えているとは思えないし、どんな思いで名付けるのかも理解できない。これはある種の虐待ではないだろうか。	まず、役所がなぜこのペットに付けるような名前を受け入れてしまうのか。そこから改善していくべきだと思う。確かに名付ける権利は親にあるかもしれない。しかし明らかおかしいと感じる名前は両親を説得し、考え直してもらうべきだと思う。また、ポスターなどを作り世間にDQNネームの存在を知って貰う事も解決に繋がるのではないかと思う。
B	13		巡ませろ！時間のねじれ！	私は筑坂まで電車を用いて通ってる。朝は通勤・通学する人々でごった返してる。なぜ、同じ時間の電車に乗る必要があるのだろう。一本早くしたり遅くしたりしても良いのではないか。そういう疑問が出てきた。	重要なことは混む時間帯を作らないことだ。そのために出来ることは、学校・職場などの集合時間をずらすことではないかと考えられる。そうすれば、それぞれ集まる時間が異なるため、乗る時間帯も変わるだろう。それを自治体等に呼びかけてみる。
B	14		本の返却率を上げよう	筑坂の図書館への返却について、筑坂の図書館には返却期間がある、この返却期間を過ぎても本を図書館に返却しない人がいるために、次に借りたい人が借りることが出来ない、なのでこれは問題だと思います。	まず本を返却しない理由を考えると、図書館はC館にあるので少し距離があるため、図書館まで行くのがめんどう、というのが理由の一つだと思うので、解決方法として、A館の各階に本の返却ボックスを設置する。
B	15		購byエコー！！	今、学者や研究員は人々に向けて、環境破壊を危惧している。しかし危惧しているだけで実際に環境破壊を防ぐために行動している人々は少ない。しかし、なんかしらの行動をしなければ何も始まらない。だからこそ、私たち生徒がECOについて行動すべきだ。	私は、生徒なら誰しも1回ぐらいは使ったことのある購買に目を付けた。購買で食事や飲み物を買う時必ず、割箸やストローが付いてくる。それを一人ひとり自分で持ってきたらどうだろうだろうか。持ってきている人には多少の割引をきかす。割引で減ってしまう利益は生徒会や、購買部の方たちとの交渉で解決させる。
B	16		STOP＊自転車盗難	私は、自転車を盗難されてから見つかるまでに時間が掛かり、新しいものを購入した後、盗難された自転車が見つかるという経験をしたことがある。自転車を多く利用する学生は被害に遭いやすいだろうと思い、自転車盗難について考えた。	第三者にも所有者が特定できるようなステッカーを作成し、盗難後でも早期発見に繋がるようにする。利用者に施錠方法や駐輪場についての注意、防犯登録を呼びかける。さらに、被害のあった場所をまとめて、注意を促す。
B	17		下駄箱革命	私が気になっていることは、学校の下駄箱である。下駄箱には棚がなく、運動靴の上に上履き或いは、革靴を重ねて置かなければならない状況だ。体育の授業の場合、靴を取り出すのに手間取り、開始に後れそうになる。	改善するには、下駄箱内に棚を作る必要がある。つまり商品化するのだ、しかし高校生の私達にとって¥100の出費さえ辛い。そこで、黎明祭の生徒達の黒字分の売り上げを商品化に回し、全生徒に配布したいと考える。
B	18		BとCの間(あいだ)の運命(さだめ)の道計画!!	筑波大学附属坂戸高校のB館とC館は遠く、わざわざA館を通らなければならない。そこで、快適な環境をつくるためにB館とC館の間に通路を作る。まずは2階だけでいいだろう。	B館とC館の間に通路を作るには、建設資金と建設時間が必要だろう。まずは、保護者達からボランティアしてもらうのはどうだろう。また、生徒会資金の余った分を積立て、できる時点から工事開始する。期間だが、夏休み中にすれば良いのではないか。
B	19		フリパラ！(フリーパラソル略)	筑坂はA館からC館に行く渡り廊下に屋根がついていない。そのため、雨の日はわざわざ1階から渡るか、自分の傘を持って渡らなくてはならない。1階に降りるには時間がかかるし、傘を持ち歩くと廊下が濡れてしまう。	生徒に使っていない傘の寄付を呼びかける。集まった傘に「渡り廊下専用」ということがすぐわかるような柄や印を付け、盗まれないようにする。そして、その傘を渡り廊下の両端に置き、生徒が自由に使えるようにする。
B	20		ポイ捨てだめー！ゴミ箱にごー！	駅から学校の1000m前後の間でもポイ捨てを一度は見かける。家の近くの川でも当たり前のように、空き缶などが流れてくる。ゴミをゴミ箱を入れるという習慣がなくなってしまっては大変だ。	路上にゴミ箱を多く設置する。300メートル間隔が理想。それに加え、ゴミの分別を最低限やらなくてはいけないものだけし、ゴミを捨てるという動作が面倒臭いと感じないようにする。ゴミの回収はボランティアを募る。

起業基礎

法務局団体登録一覧

登録番号	企業名	主な活動内容	構成員数	登録月日
201001	クローバー・クラフト	手作りシュシュ・小物入れの製作	3	9月28日
欠番				
201003	Limitter of Hazard	河川などの環境改善。	5	10月5日
欠番				
201005	本に咲く花	道徳手作り本作成。幼・小学校に設置。	3	10月5日
201006	A Small Present☆	古い学用品の回収。アフガンに送る。	2	10月5日
201007	team sanitary	無添加石けん作成、無料配布。風邪予防広報活動。	4	10月5日
201008	TNN(ツクサカニュースネットワーク)	起業基礎の団体の広報活動。	8	10月5日
201009	筑坂証券取引所	起業基礎内での株式発行。	2	10月5日
201010	U－17	埼玉県食材使用の食品販売。	8	10月5日
201011	新筑坂広報プロジェクト	筑坂新カリキュラムの広報活動。	10	10月5日
201012	天使の文庫	手作り絵本作成。幼・小学校に設置。	5	10月5日
201013	しゅわわせ	保育園・幼稚園での手話の普及。	4	10月5日
201014	Parfum of Tiost	公共トイレ改善・芳香剤を設置。	4	10月5日
201015	放課後ウォッシュタイム	ハーブ石けん作成、販売。	3	10月12日
201016	筑坂生の小銭を守れ！	パスモ対応自動販売機の設置。	4	10月12日
201017	PLUM☆	越生町の梅を用いた加工品作成。	7	10月12日
201018	つくさか未来小学校	食農教室開催。幼・小学校に設置。	5	10月12日
201019	JEY	マイ箸持参運動	3	10月12日
201020	Three R Project	不要品回収業。フリーマーケット開催。	6	10月12日
201021	虫食倶楽部	イナゴの捕獲。つくだ煮販売。	7	10月12日
201022	AKKY	ダイエット(低カロリー栄養)食品の作成、販売。	4	10月19日
201023	渡り廊下歩き隊	A館－C館渡り廊下に傘を設置。	8	10月19日
201024	FQAF	鍋レシピ作成。	7	10月19日
201025	筑坂アートキャンドル販売会社	不要品を原料にアートキャンドル作成、販売。	2	10月19日
201026	ヘルシーベジタブル	野菜チップスの作成、販売。	8	10月19日
201027	筑坂改善プロジェクト	空き缶回収、学校清掃。	3	10月19日
201028	エンヘタイワン ホローフ	モンゴル緑化事業。クラピア栽培。	2	10月19日
201029	ちるどれん Smile	道徳的紙芝居作成。幼稚園児に実演。	5	10月19日
201030	いわ槻	古着収集。児童養護施設などに配布。	4	10月19日
201031	モーション娘。	ペットボトル再利用Yシャツ作成・販売	10	10月26日
201032	WORLD LIFE	募金活動・寄附	3	10月26日
201033	陸奥微志	サッカーを中心とした運動教育。	7	11月4日
201034	筑坂守り隊	学校内盗難防止活動	4	11月4日
201035	JOY	栄養冊子プロジェクト	4	11月4日

資料４

事業計画書

事業審査

1．事業団体名	U−17			団体番号	201010
2．スタッフ構成	役　職	クラス番号	氏　名	中心になって行う仕事	
	社長			全体の統括	
	副社長			社長のサポート	
	経理			お金の管理	
	書記			提出に必要な書類の管理及びスケジュール管理	
	広報			宣伝部長　接客	
	渉外			情報の提供	
	食品管理者			料理＆衛生責任者	
	庶務			全体のサポート	

3．事業の名称	野菜生活始めました。
4．企画立案の背景 社会的課題	今、日本の食料自給率は減少傾向にある。また世界の先進国の中でも食料自給率は最低だ。日本の農業の技術や安全性はトップクラスで、安心・安全で美味しい野菜があるのにも関わらず、それに気づかず消費者は安い中国産やアメリカ産を求める傾向にあるのが現状だ。また、中国産の野菜は農薬の残留等で安全性に疑問があるにも関わらず、国産の野菜と比較して低コストなので、やはり不景気の今、なるべく支出を抑えたい消費者は安く買える中国産野菜をとるためである。しかし、最近健康志向の風潮も増え、国産の野菜の新鮮さや安全さがテレビや雑誌でも多く取り上げられるようになり最近よく「地産地消」というキーワードをよく耳にするようになった。しかし、地産地消はどちらかというとブランド野菜のほうが効果が出てきていると思う。私たちが住んでる埼玉県にもサツマイモや狭山茶、西町大根、くわい、深谷ねぎ等の全国に誇れる埼玉県の農産物や特産物があるにも関わらず、「ブランド」として確立している商品ばかり注目され、それ以下の地域には目が行かないのが悲しい現状だ。しかし埼玉には埼玉のよさがある。それを身近な人たちにアピールしていきたいと考え今回の企画を考えた。
5．事業のねらい（活動の目的）	今回は、私達でＰＲしていく食材は狭山茶とサツマイモに絞っていく。理由は狭山茶はお茶の「ブランド」として有名な静岡茶や宇治茶などがあるが、狭山茶は毎年開催されている全国茶品評会及び関東ブロック茶の共進会等において常に上位入賞を果たすほど誇れる名産でもある。また、味が濃厚で苦味も少ないので苦いのが苦手な方でも飲んでもらえるものになっている。そんな点をアピールしたいからだ。またサツマイモも、「ブランド」として知覧紅や鳴門金時、五郎島金時などがあるが、やはり埼玉にも「川越いも」というサツマイモがある。しかし、「栗（九里）より（四里）うまい十三里（江戸から川越までの距離）」といわれるほど焼き芋や蒸かし芋にするとその甘みが生かされる。そのような点をアピールしていきたいと考えている。狭山茶、サツマイモをクッキーとパウンドケーキにいれ小さなところをこだわっていきたいと思っている。例えば、小麦粉や卵も埼玉県産にこだわり、なるべく調味料を使用せず、素材の風味を楽しんでもらえるような商品にしていきたと思っている。サツマイモのクッキーは小麦粉をほとんどしようせず、蒸かして裏ごしいたサツマイモをふんだんに使用し、しっとりといたクッキーにパウンドケーキにも蒸かして裏ごししたサツマイモとごろごろとサツマイモをいれ食感を与えてみたり、狭山茶のクッキーは今流行のクリスピー感があるものにしてお茶葉も粉末にせず、お茶葉の食感を与える。また狭山茶のパウンドケーキには狭山茶を濃くしたものと生地を混ぜ、茶葉をいれくどくならない程度に狭山茶の味を押していきたいと思っている。また、販売時に食材を仕入れる直売所や農家の方々の紹介をしていきたい。そのときに商品の中にそのお菓子のレシピを書いた紙を入れたり、観光案内所からもらった、特産品の紹介されているパンフレットやポスターを掲示していきたいと考えている。レシピの紙には、なぜ狭山茶やサツマイモを使ったほうがおススメなのかなど一言ポイントとして書いてＰＲしていきたいと考えている。
6．事業のターゲット（受益者）	・筑坂の生徒　・埼玉県在住の農家の方々 学校説明会に来てくださる中学生とその保護者
7．セールスポイント ※企画の独自性	・埼玉県産にとことんこだわる ・健康志向でヘルシーに ・直売所という場所を知ってもらえる。
8．事業の主な内容	1、地元食材を使用して、菓子類の製作、販売 2、地元食材のＰＲ
9．事業実施期間	２０１０年１０上旬〜１２月末日まで　実施場所　筑波大学付属坂戸高校

10．事業実施のスケジュール

月	日	活動内容	備　考
10	上旬	メニュー決定、	
10	中		
	｜		
11	上旬	試作品を作る	
11	中		
	｜	材料仕入先などの検討	
	下旬	宣伝の準備	
12	上旬	商品の製作と販売	
12	中旬	↓	
12	下旬	反省	

11．期待される成果	1、地元食材の味などの再確認 今回販売する商品は風味をとても大切にしている商品なので実感することができると思う。 2、地元の食材へ意識を向ける。 →食べてもらうことにより地元の食材の魅力を知ってもらう。
12．事前に行う手続き	学校施設の貸し出し・材料仕入れの調整等。
13．備　考	

UTSS財団

資金計画書

企業番号	UTSS財団
201010	

団体名	U-17		
ｽﾀｯﾌ			
実施期間	１１月上旬～１１月下旬	企画実施場所	校内事務室前、Ｂ館１階

●収入

	費目	単価	個数	合計額	備　考
1	助成・融資申請額			25,230	
2	予定単価による予想利益	200	140	28,000	材料時価のため利益変更の可能性あり。 商品の内訳　校内販売×２ 狭山茶クッキー・サツマイモクッキー 狭山茶パウンドケーキ・サツマイモパウンドケーキ 各10食　計40食 学校説明会×１ 狭山茶クッキー・サツマイモクッキー 狭山茶パウンドケーキ・サツマイモパウンドケーキ 各15食　計60食
	合　計			25,230	最低計70食販売・売上14000円

●支出　（企画運営に必要な物品および経費）

	費目	単価	個数	合計額	備　考
1	特別教室（調理室）利用(平日)	300	3	900	
2	材料費（予定）	11,500	1	11,500	材料時価のため単価変更の可能性あり。
3	検便費（送料等込み）	763	8	6,100	単価繰り上げで４円は端数処理
4	施設使用料(平日)	100	2	200	
5	施設使用料(休日)	1,500	1	1,500	
6	机	10	3	30	
7	宣伝・装飾・包装費	5,000	1	5,000	包装代100円×25　宣伝・装飾代2,480円
	材料費内訳				予定の仕入価格 小麦　390円×４　サツマイモ　1,100円×１ 茶　300円×　卵　199円×10（未購入）砂糖　98円×３ ベーキングパウダー　290円（未購入）　黒ゴマ200円× バター　660円×６ 残り3266円は未購入のため
	合　計			25,230	

●助成・融資決定額

以上により、資金を助成・融資することを決定致します　助成・融資額 [redacted] 円　担当印

資料 6

団体番号	201009	団体名	筑坂証券取引所			
審査日	2010年 10月 12日		1	回目	担当者	岡、吉備、小澤、吉岡、芳川、田代

分類		評価の観点	着目点	評価(○、△、×)	メモ
問題設定	A	社会のニーズを適確に捉えているか	事4	×	他の団体にニーズがあるのかどうか調べていない。調査不足。
	B	事業目的は明確か	事5、6	×	
公益性	C	公益性はあるか	事5、8、11	×	結局返済はしなければならない。安心して取引ができるとは思えない。
整合性	D	事業計画は具体的で実現可能か	事8、9、10	×	理論的に成立しない仕組みになっている。
	E	目的達成のための計画として適切か	事5、8、9、10	×	
	F	資金計画は適正か	資	×	
	G	成果目標は明確か	事11	×	
団体	H	構成員の役割分担は明確で適確か	事2	○	
	I	構成員のやる気、積極性は感じられるか	人物	◎	

採否(○×)	×

	項目	コメント(必要な部分のみコメントを書く)
評価	A	他の団体にニーズがあるかどうかを調査するべき。
	B	目的に書くべき内容ではない。最終的に自分たちの行おうと考えていることを書く。
	C	ない。自分たちのやりたいことに終始してしまっている。
	D	シミュレーションをして、その資料を持ってきて欲しい。
	E	説明会を開けば必ず人がくると思っているのか？
	F	5万円必要な根拠は？収入から支出を引いた残金は何に使うのか？
	G	株式への意識を高めるのか、他の団体を助けるか、目的がはっきりしていない。意識を高めるなら他の方法はあるはず。
	H	
	I	やる気は感じられる。
総評	独自性、ユニークさは評価できる。しかし、ニーズが捉えられていないので、その時点で論外。ニーズ調査をした上で判断しても良いが、現状だと事業が成り立つかどうか難しいのでは？最低でも6割、7割くらいの団体にニーズがないと、現実的に成り立たないと思われる。具体性に欠ける。現状では恐らく成立しない事業ではないか。	

起業基礎　　2010.11.26

ヒアリング　教員マニュアル

1 第3回ヒアリング実施　平成22年11月26日（火）4時限目

時　間	内容	HR教室担当（待機生徒の監督）
11:40～11:45	授業の流れを確認	岡・今野・小澤真・初谷
11:45～12:00	ヒアリングC組	小澤真
12:00～12:15	ヒアリングD組	初谷
12:15～12:30	ヒアリングA組	岡
12:30～12:45	ヒアリングB組	今野
12:45～12:50	今日のふりかえり	岡・今野・小澤真・初谷

2 グループ分けと会場

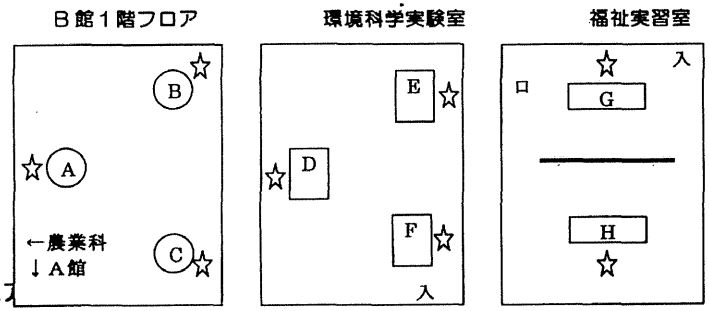
＊各グループのメンバーはランダムに分けているので、表の番号順のように並んで座らせる

グループ名	出席番号	会場
A	20/34/23/36/7	B館1階フロア
B	3/14/32/37/2	
C	29/9/22/35/24	
D	26/15/21/17/12	環境科学実験室
E	28/1/8/13/6	
F	31/11/30/33/27	
G	18/16/19/39/5	福祉実習室
H	25/10/40/38/4	

ヒアリングの基本スタイル

「グループ分け一覧（別紙）」の名簿の左から順に①～⑤番へ着席

3 会場配置図　☆は教員の位置を示す



4 ヒア

※HR担任は担当クラスのヒアリングを行わない。（○印はHRへの誘導係）

時間	ヒアリング	HR	A	B	C	D	E	F	G	H
11:40～11:45	本時の確認	＜HR担当＞ 岡・今野・小澤真・初谷				＜会場作成＞ 後藤・工藤雄・吉備・田中・吉岡				
11:45～12:00	C組	小澤真	岡	今野	○初谷	工藤雄	吉備	田中	後藤	吉岡
12:00～12:15	D組	初谷	○岡	今野	小澤真	工藤雄	吉備	田中	後藤	吉岡
12:15～12:30	A組	岡	初谷	○今野	小澤真	工藤雄	吉備	田中	後藤	吉岡
12:30～12:45	B組	今野	初谷	岡	○小澤真	工藤雄	吉備	田中	後藤	吉岡
12:45～12:50	まとめ	各HR担当者								

5 ヒアリングの流れ

11:40
本時の活動の確認（5分）　確認後、ヒアリング担当者・B組生徒は各会場に移動

11:45
C組（15分）　終了後、C組の生徒は**二階渡り廊下を通って**、HRに移動。
ヒアリングから戻り次第、初谷はD組の生徒に**三階渡り廊下を通って**のヒアリング会場へ移動を指示。D組の準備。

12:00
D組（15分）　終了後、D組の生徒は**二階渡り廊下を通って**、HRに移動。
ヒアリングから戻り次第、岡はA組の生徒に**三階渡り廊下を通って**のヒアリング会場へ移動を指示。A組の準備。

12:15
A組（15分）　終了後、A組の生徒は**二階渡り廊下を通って**、HRに移動。
ヒアリングから戻り次第、今野はB組の生徒に**三階渡り廊下を通って**のヒアリング会場へ移動を指示。B組の準備。

12:30
B組（15分）　終了後、B組の生徒をHRに戻す。

12:45
まとめ　（10分）

12:50

※各ヒアリングでは、ヒアリング評価シート（別紙）に記入しながら進める。
※ヒアリング終了の生徒と、これからヒアリングを受ける生徒を接触させない。
※各時間の移動は能うかぎり迅速に。

資料 8

起業基礎ヒアリングチェックシート

起業基礎目標（７つの力）

①問題発見力（社会のニーズを見つける力）
②アイデア力（発見した問題を解決するアイデアを考案する力）
③企画力（アイデアを具現化する力）
④実行力（発想したアイデアを実現可能な企画にする力）
⑤情報力（必要な情報を集め、活用し、発信する力）
⑥チームワーク力（他者の考えを理解し、協力していく力）
⑦プレゼンテーション力（自分の考えを相手にわかりやすくまとめて伝える力）

質問１　あなたの好きなこと、または得意なことは何ですか、またそのことはどのような形で社会に活かすことができそうですか。

質問２　これまでの講義のなかで、実際にさまざまなＮＰＯ活動及び起業活動を行っている人たちの紹介がありました。あなたが印象に残った人を挙げて、どのような活動をしていたかを教えて下さい。また、あなたはその活動のどのような点に価値を見出したのかを具体的に説明して下さい。

質問３　働くことの目的は何ですか。１・２年生の授業で学んだことをふまえて答えて下さい。また、いま現在、あなたが考える「働く目的」は何だと考えているか、具体的に教えて下さい。

グループ（　項目１　）　場所（　項目１４　）
評価者（　項目１５　）　時間（　項目１６　）

組番	氏名	質問１		質問２		質問３		ヒアリング態度（プレゼン力）				合計（20点）
		メモ	評価 1－5点	メモ	評価 1－5点	メモ	評価 1－5点	話す態度 0－2点	聞く態度 0－1点	外見 0－2点	態度評価 0－5点	
項目	項目２											
項目	項目４											
項目	項目６											
項目	項目８											
項目	項目１０											
項目	項目１２											

態度チェック項目

●話す態度（０～２点）
・言葉遣い、明瞭さ
・相手を見て話す
●聞く態度（０～１点）
・相手を見て話を聞く
●外見（０～２点）
・服装
・姿勢

資料 9

ヒアリング①（質問項目と評価の観点）

「これから３つ質問をします。１つずつ質問していきますので、指名された人は答えて下さい。」

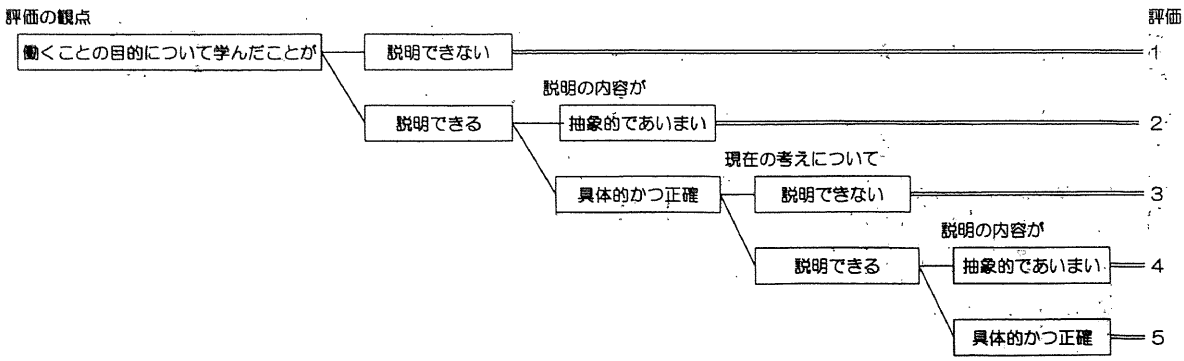
※３つの質問の受け答え中にチェックする事項

1. 言葉遣い・言葉の明瞭さ（両方で１点）
2. 質問者の目を見て話しているか（１点）　} 話す態度（０－２点）
3. 質問者を見て話を聞いているか（１点）　聞く態度（０－１点）
4. ヒアリングにふさわしい服装か（１点）
5. 話を聞くときの姿勢はよいか（１点）　} 外　見（０－２点）

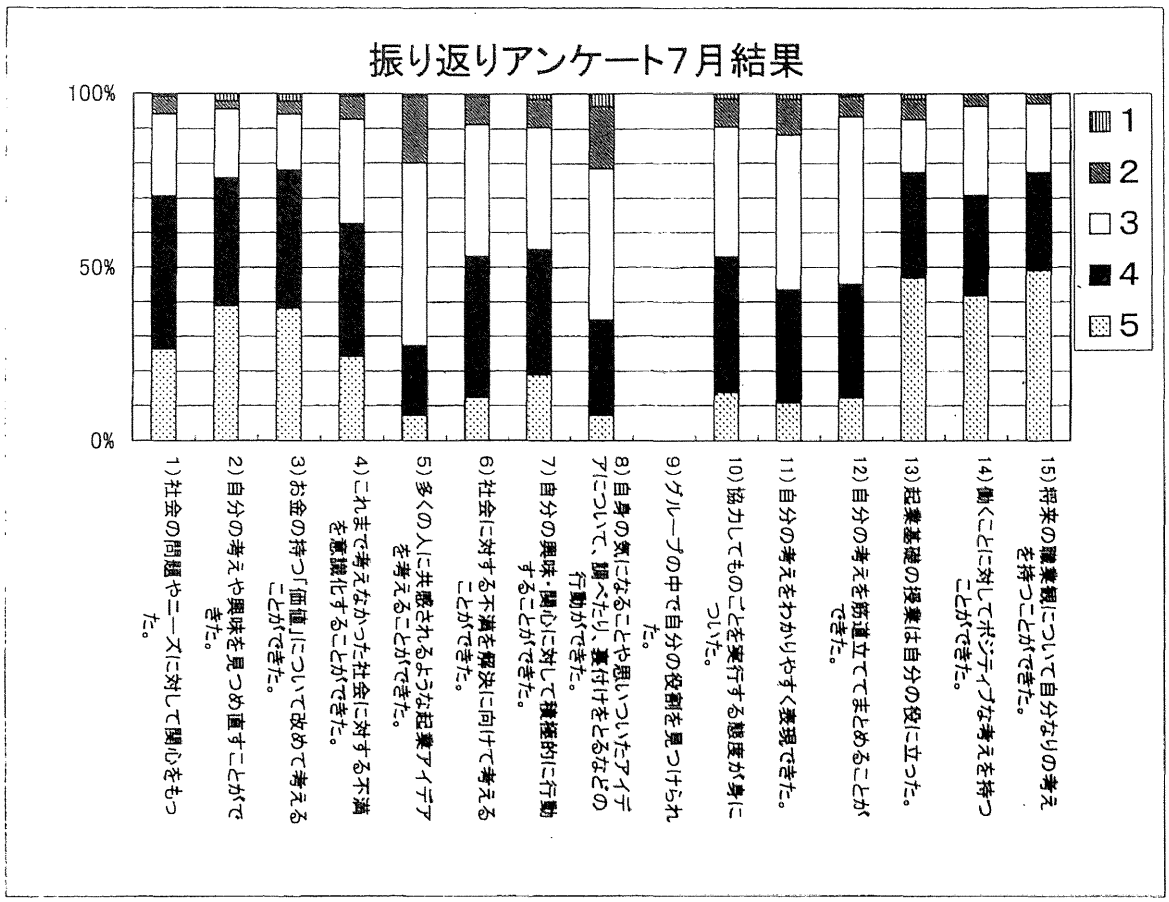
合計　５点満点

【仕事の目的と１年次との連結】

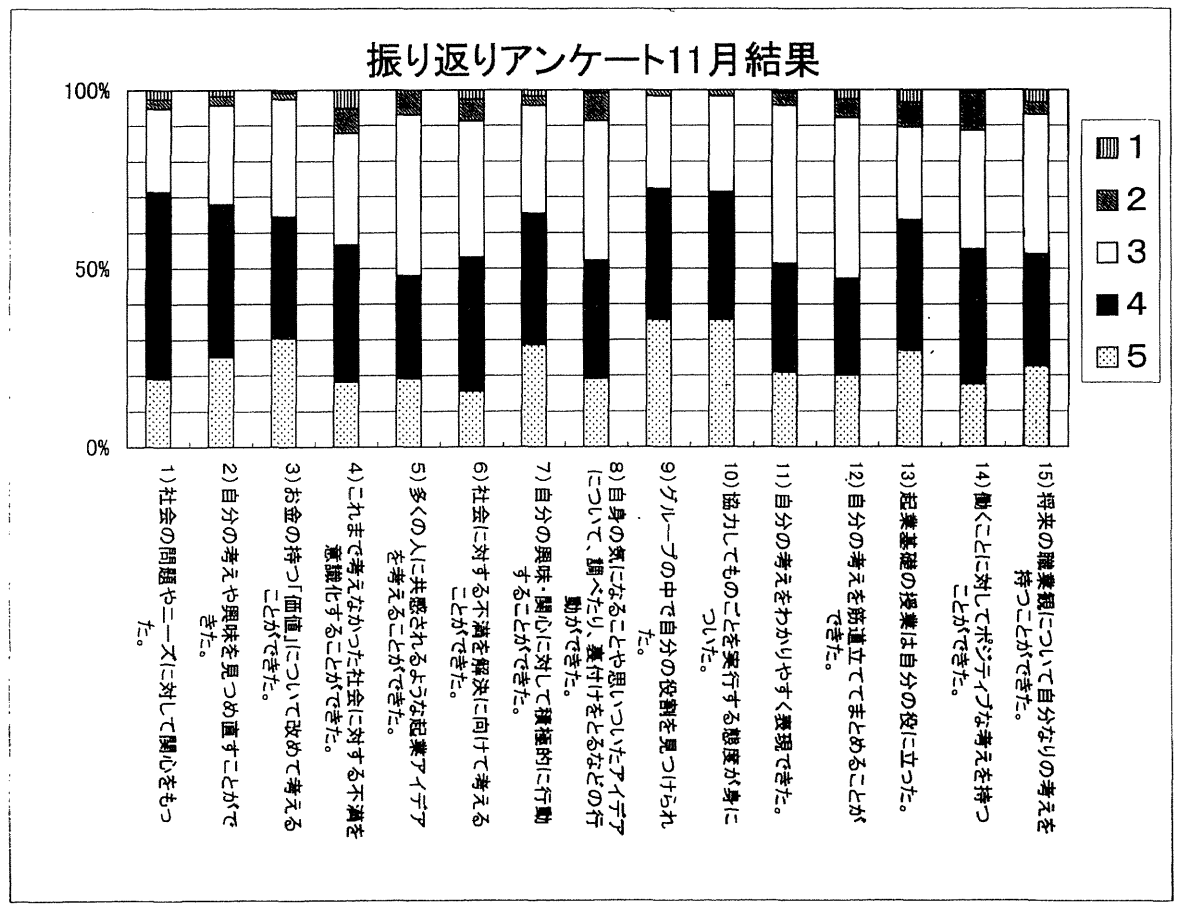
項目３：働くことの目的は何ですか。１・２年生の授業で学んだことをふまえて答えて下さい。また、いま現在、あなたが考える「働く目的」は何だと考えているか、具体的に教えて下さい。

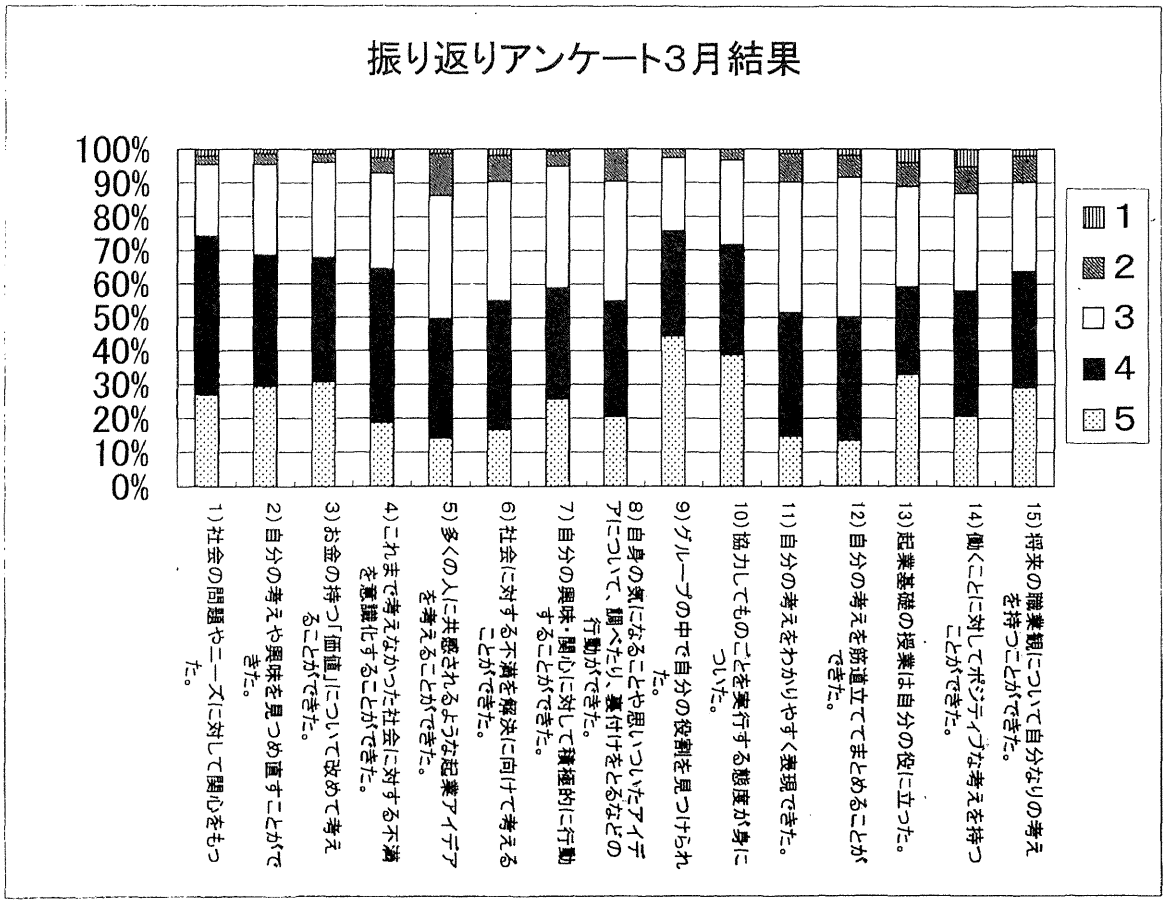


資料10


振り返りアンケート7月結果
100%
50%
0%
1
2
3
4
5
15)将来の職業観について自分なりの考えを持つことができた。
14)働くことに対してポジティブな考えを持つことができた。
13)起業基礎の授業は自分の役に立った。
12)自分の考えを筋道立ててまとめることができた。
11)自分の考えをわかりやすく表現できた。
10)協力してものごとを実行する態度が身についた。
9)グループの中で自分の役割を見つけられた。
8)自身の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとるなどの行動ができた。
7)自分の興味・関心に対して積極的に行動することができた。
6)社会に対する不満を解決に向けて考えることができた。
5)多くの人に共感されるような起業アイデアを考えることができた。
4)これまで考えなかった社会に対する不満を意識化することができた。
3)お金の持つ「価値」について改めて考えることができた。
2)自分の考えや興味を見つめ直すことができた。
1)社会の問題やニーズに対して関心をもった。

資料10


振り返りアンケート11月結果
100%
50%
0%
1
2
3
4
5
15)将来の職業観について自分なりの考えを持つことができた。
14)働くことに対してポジティブな考えを持つことができた。
13)起業基礎の授業は自分の役に立った。
12)自分の考えを筋道立ててまとめることができた。
11)自分の考えをわかりやすく表現できた。
10)協力してものごとを実行する態度が身についた。
9)グループの中で自分の役割を見つけられた。
8)自身の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとるなどの行動ができた。
7)自分の興味・関心に対して積極的に行動することができた。
6)社会に対する不満を解決に向けて考えることができた。
5)多くの人に共感されるような起業アイデアを考えることができた。
4)これまで考えなかった社会に対する不満を意識化することができた。
3)お金の持つ「価値」について改めて考えることができた。
2)自分の考えや興味を見つめ直すことができた。
1)社会の問題やニーズに対して関心をもった。


振り返りアンケート3月結果
100%
90%
80%
70%
60%
50%
40%
30%
20%
10%
0%
1
2
3
4
5
15) 将来の職業観について自分なりの考えを持つことができた。
14) 働くことに対してポジティブな考えを持つことができた。
13) 起業基礎の授業は自分の役に立った。
12) 自分の考えを筋道立ててまとめることができた。
11) 自分の考えをわかりやすく表現できた。
10) 協力してものごとを実行する態度が身についた。
9) グループの中で自分の役割を見つけられた。
8) 自身の気になることや思いついたアイデアについて、調べたり、裏付けをとるなどの行動ができた。
7) 自分の興味・関心に対して積極的に行動することができた。
6) 社会に対する不満を解決に向けて考えることができた。
5) 多くの人に共感されるような起業アイデアを考えることができた。
4) これまで考えなかった社会に対する不満を意識化することができた。
3) お金の持つ「価値」について改めて考えることができた。
2) 自分の考えや興味を見つめ直すことができた。
1) 社会の問題やニーズに対して関心をもった。